

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	最後の編輯を終つて
Author(s)	竹内
Citation	龍南, 239: 116-116
Issue date	1937-11-13
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/7461
Right	

最後の編輯を終つて

竹 内

印刷屋の衛藤さんが云つた。「生徒の手で校友會の雜誌を出してゐるのは、私の知つてゐるところでは五高だけです。七高も佐賀も何處も先生が主になつてやつてをられます。然し五高も、昔はもつと盛でしたな。今では書く人が少なくて決まつてゐるやうですが。」と、五高生の諸君は此の言葉を何と聞くだらう。

文化運動の盛だつた頃のこととは知らない。然し餘りと云へばあんまりな今の状態ではある。何と生氣のない學園の姿だらう。萎微沈滞は現代文化の一般的な事態だと云ふのか。すべてのものが混沌の中にあつて一條の光明も望まれない。然し、その中から秩序を生み出す努力が忘れられていゝと云ふのだらうか。我々は、いやが應にでも、次のジェネレーションを擔ふべく運命づけられてゐる。我々の無氣力、無秩序にかゝはらず、次の時代は我々の時代となる。若し、そのやうな時代が來たら、世の中はどのやうな状態を示すのだらうと、私は不安の念を以て考へて見ることもある。昔、學生は文化の推進力であり、その状況に於ける何等かのイニシアチヴをとつてゐたのだ。學生インテリと云ふ言葉が生れた位、學生はインテリゼンスを持つてゐたと思ふ。そして彼をそのやうに驅り立てる情熱の昂揚があつた。彼等の思想そのものについては今、問題ではない。

今の學生層と云ふものは、もはや知識階級ではない。若し、知識階級と云ふことが、知識の所有を意味するものならば、私の此の言葉は嘘であらう。然し、知識階級とは、知性を有する人々の社會層だとするならば、残念ながら私の考も誤つてゐないだらうと思ふ。

此のやうな状況の下にあつて、私達は、貧弱な雜誌の仕事を経て來たのであつた。先輩達の殘した傳統と誇りとは墮としくないと努めた。けれども、それは無駄であつた。文化とは一つの状況である。雰圍氣のないところに文化の花は開かないのである。龍南は墮落した。どうかして發行を續けて行くだけでもいゝとせねばならない位貧弱になつたのだ。雰圍氣が文化を作ると同時に、文化が雰圍氣を作らねばならない。その意味で、私達は、責任を免れることは出来ないだらう。然し、何よりも文化的環境のないことが龍南文化の低下の最大原因である。そして、そのやうな問題は大きな社會問題にまで擴がるであらう。我々はやはり責任を外にもつて行かずに、自己の活動によつて雰圍氣を作ることを企てねばなるまい。

私達は雜誌の編輯の仕事を次の人々に引き繼ぐ。そして次の人々に、墮落した「龍南」に何等かの向上を期待する。現在の文科の二年生諸君の間には文化に對する要望の叫びが擧つてゐることを知つてゐる。二年生諸君。雜誌部を援助せられよ。「龍南」こそ五高文化の結實である。一年生の諸君、殊に、今回投稿された諸君も、へたばらずに、努力して頂きたい。「龍南」は雜誌部委員の雜誌ではない。單なる文藝部の同人雜誌でもない。五高全体の雜誌なのだ。他の高校には文藝部の同人雜誌がある。校友會の雜誌以外にあるのだ。「龍南」は五高の雜誌である。それが委員の雜誌になり終つて、而も他校の同人雜誌にも及ばないといふ五高の現状なのだ。一、二年諸君の奮闘を待つ。

終りに審査をお願いして、いろいろ御迷惑をおかけした、竹下門前、上田の諸先生に厚く敬意を表します。